【にんげん部門（高校生の部）・佳作賞】

成長していると気づく

私立伊奈西高等学校　３年　大澤　珠明

以前は大きく見えていたものが、とても小さいと感じるようになった。大好きなパンダのぬいぐるみや母のエプロンのポケット。自分の体ほどもあったランドセルも、今見れば私の膝にもとどかないほど小さい。かくれんぼで必ず使っていた机の下が記憶よりも狭いのを見て、私が大きくなったのだと悟った。

以前は小さかったものが、とても大きくなった。母のいとこの腕の中で私の指をにぎっていた小さなはとこは、いつのまにか走り回るようになっていた。数年前まではだっこできていた妹は、なぜか私をおぶれるようになっていた。大きくなるのは、私だけではないと理解した。

日常の中で自分がどのように育っているのかはとても分かりにくい。それどころか、肉体的にも精神的にも大きくなっていく周りを見て、自分の変化のなさに落胆することも多々ある。しかし、きっとそれは気がついていないだけなのだろう。誰かが時間だけは平等に過ぎると言ったように、その過ぎる時間の中で私たちは等しく大きくなっているにちがいない。

私はできることは増えていく同年代の人たちを見てあせっていた。どうして私はこんなこともできないのか。上手にこなすあの人に追いつかなければと。けれど、思いかえしてみれば私にできることもたしかに増えていたのだ。苦手な英語は、短文なら読めるようになったし、初めて会う大人とも笑顔で話せるようになった。気がついてしまえば、変わっていることはたくさんあった。もしかしたら私の視界はあせりで狭くなっていたのかもしれない。

成長の度合は個人によるだろうが、私たちはたしかに大きくなる。自分の知らないところで成長しているのは、なにもよその子だけではないと分かった。この考えを忘れず、落ちついてこれからを暮ごしたい。きっとその先にはさらに成長した自分がいるはずだから。